福島敏夫随筆集「乙戸南雑話『花鳥風月および星・虹を愛でながら』」主宰学論説 55

天地人：天に星、地に花、人に愛、または、天の理、地の利、人の絆

《天に星、地に花、人に花》という言葉は、武者小路実篤さんの色紙によく見られる。昔、大の教養学部時代、下宿の部屋の手紙入れを、柱に取り付けていたが、その手紙入れのところにも、その言葉があったことを、何故か思い出す。高山樗牛『天にありては、星、地にありては、花、人にありては、愛、これ、世に美しきものの最たらずや。』の文章に由来するようである《ウィキペデ ィア日本語版より》。白樺派の代表作家の一人として知られる、武者小路実篤さんが、気に入っ
て、生涯うまくならなかったと言われる絵の添え言葉として、よく使ったようだし、世の人も、一般的によく使うが、明治時代の抒情派詩いまどわされない人高山樗牛の言葉であったことを、改めて認識したいものである。

また、《天の理、地の理、人の絆》という言葉も、よく耳にする。中国の魏蜀呉三国史時代の名戦略家として知られている諸葛孔明の、戦いを有利に導く処世術を表すものと思っていたが、 どうも、そうではないようである。「天の時、地の利、人の和」として、中国戦国時代の儒学者・孟子の著書『孟子』公孫丑下篇に登場する言葉が起源であるようである。孟子が、「天の時は地の利に 如かず、地の利は人の和に如かず」と述べたことが始まりで、戦争における勝利条件を論じた中で、天候や地形よりも人心の一致団結が最も重要であると説いたそうである。この思想は古代中国の兵法書『孫子』にも通じるもので、戦略論としてだけでなく、政治哲学やリーダーシップ論としても 広く受け継がれてきたようである《ことわざ・慣用句の百科事典等より》。平和を望まない人や国は、少ないと思われるが、それを実現するためには、連携、協力、外交などを駆使した、それなりの努力も必要である事を教えているようである。

昨今、言論の自由と責任、偽情報に踊らされない的確な判断、著作権・知的財産権の尊重などの重要性が増す中で、日頃何気なく使っている言葉・格言なども、振り返って、その意味や起源を調べてみるのも、悪くないし、有用かと思われる。

2026 年5 月17 日初稿
2026年11月8日修正と追加
旧プロシア出身のエマヌエル・カントが、「永遠平和のために」という記述を残して、平和の成立条件を示していたという。それとともに、孟子の論述を読み合わせてみると、「戦争と平和」について、改めて、よく考えたい気持ちが出てくるようである。